

「あるときには野山を潤し、あるときは災いとなる。水の持ち主は気まぐれなのでしょいか」

沈みかけた太陽が木々の影を長くした。それでも小川のせせらぎは絶え間なく水音を奏でている。

「ほれ、その川の水をわしが桶に汲んで持ち帰っても、困るもんも怒るもんも誰もおらんじやろ。けど、

わしがここで堰止めてしもうたらどうじや、困るもんが血相かえて押し寄せて来る。水とはそういうもんじや」

権左は、薄笑みを浮かべた。

「私は一生をかけてその答えを解かなくてはならないのかも知れません」

芝山先生に導かれここまでやってきた。目的は

どれひとつ叶えられなかったが、権左に会ったことで、何か問題を解く手掛かりを得られたような気がした。

権左は黙ってぞうりを脱ぐとバシヤバシヤと川の中に入って足や手を洗った。そして直ぐに手ぬぐいを持って岸に上がってきた。

乱れた鬚、無精ひげはそのままで、へんくつな男からは想像がつかないほど柔らかい表情に変わっている。そして、足を拭きながら彦輔を見た。

「たえはな、わしの子じやないんじや」

突然の話に彦輔の顔が固まる。

「自分からいうのは始めてじやが、おまんに聞いてほしいうなった」

「本当の子ではないということですか」

「あいつは捨て子なんじや。まだ、乳飲み子の時に、

ほれ、その木の下に捨てられとった。あれから十八年、長いようで昨日のことも思えての」

この時代、裕福ではない境遇に生まれた子の運命は儚い。捨て子は珍しくなく、運よく育ての親が見つければ良いが、それもなければ短い生涯を終えることになる。

たえは運が良かった。ため池造りの頭領に拾われ育てられた。権左は字も読めず、書くこともできなかったが、頭の良いたえは独学で字を習い、十歳の頃からため池造りの現場に出て手伝いを始めたらしい。多くのため池を修繕したり堰堤の補修に走りまわり今では知識を持った腕の立つため池職人

だとも話してくれた。

それならば、なぜ、たえが新田村に行くといった時、認めることをしなかったのかと訊いた。

「たえには、一つの仕事を任せるわけには、いかん」「なぜ」

「じやから、一人前には程遠いからじや！」

権左の口調が荒くなった。彦輔は、それ以上、せん索するのを止めることにした。へんくつな男の片鱗が見えた。やはり頑固者だ。これ以上の議論は権左を怒らせるだけだと思った。

その夜、三人で夕食を食べた。一汁一菜だけの質素な食事である。権左の方針なのだろうか、食事の間、全く会話は無い。たえも、ただ黙って飯を

口に運ぶ。権左が空になった飯椀をたえの目の前に差し出すと、たえは無言で釜から飯をよそい、権左に差し出す。権左はそれを受け取ると、黙って喰う。食事が終わると、権左は立ち上がり、そそくさと奥の部屋に立ち去った。その間、一言の会話もなかった。

彦輔は権左が扉を閉めたのを確認して、たえの横顔をのぞきこむ。

「食べる時には、いつも話さないのかい」

「ああ」とたえが小さな声で答える。「昔から？」

と訊き直すと、たえは、振り返り目をつりあげて彦輔を睨んだ。

「他人から見ると不自然かもしれないが、権左は、この世で唯一無二の父だ。今の生活は気に入っている。

もう一度訊くと洗い物の手を止めたたえは、真剣な表情で振り返った。

「では、なぜ、父は私を認めない、私の技と知識

は三国一じゃ。なぜ、一人前ではないのか」

返す言葉がない。

たえは、彦輔が言葉を失っているのを確認すると、また洗い物を始める。静かな夜に洗い水の音だけが寂しく響く。

「私が権左の実の娘でないことくらい知っている。水を溜める土木術を教えてくださいましたのは権左だ。いく

ら不満があっても師匠でもある父に仕えるのが私の役目なのだ。彦輔、お前の気持ちはわかったから、もう寝ろ」

ただ一つを除いて……」

ただ一つとは何かと問うてみるが、たえは無視するかのように黙って片づけ始める。それからは何も語らず、水瓶から水を汲むと、桶にみんなが食べた椀をいれて、外に持ち出して行った。

それを追うように外に出た。月の明かりの中で、たえが洗い物をしている。そしてその横に座った。

「手伝おうか」

「必要ない。父に見つかつたら殴られる。もう寝ろ」

権左が、たえのことを優秀なため池職人だといっていたことを伝えた。しかし、黙って洗い物を続ける。

たえのいう、一つを除いてはという言葉が気にかか

満月の明かりは、たえの束ねた髪と寂しそうな横顔を照らし出していた。

次の日、権左は隣村のため池修繕に彦輔を同行させた。当然、たえも一緒だ。

池は農繁期にもかかわらず、水が全て抜かれていた。ため池の重要な部分、ゆるという水の出口が朽ち果て、水が漏れてしまったらしい。

権左は村の男衆に、朽ち果てた木でできた部分の撤去を命じ、たえには新しい木で、ゆるを組むことを命じた。権左は、手際よく池の出口部分を成型すると、たえが組んだ真新しい、ゆるをその部分に設置した。

ゆるはなぜか不自然にも出口方向が高く設置され

ている。技を持った職人も年齢には勝てないのだ
ろう。これぐらいの初歩的な間違いは彦輔にもわかる
「権左さま、これでは、流れに逆らう逆勾配になつ
ているのではないですか、もう一度取り付けを直され
た方が……」

そこにいた数人の男衆も同じ疑問を持つてい
たのだろう。権左の顔を見る。

「これでええ」

権左は間違いを認めない。そればかりか、すでに帰
り支度を始めているではないか。彦輔はたまらず、た
えを見る。たえも同様に道具を片づけている。

「たえさんは、間違っていると思わないのかい」

「これでいい。完璧だ」

の笑顔が広がった。

権左は帰りの準備を整え、たえに埋め戻しの
指示を出している。

相手にされない彦輔が権左の所へ歩み寄る。

「すいませんでした」

「おまん、素人じゃろ、素人はいろいろというもん
じゃ。気にせんでええ。さあ、帰るぞ」

道具を担いでさつさと引き揚げようとしている。振
り返ると、たえが男衆と土を埋める作業を始めて
いた。

「たえさんだけで大丈夫なですか」

権左は、振り向きもせず「大丈夫じゃ」とだけいい
残し、その村を後にするのだった。

「でも……」

不安が拭いきれない。

それを見かねたたえは、不自然な取り付け方法のわ
けを教えてくださいました。

池の底より出口を高くすることで、ゆるは常に水
の中、木は常に水中にあることで朽ちるのを防ぐ
のだそうだ。ため池職人が経験の中から得た技で
ある。

その説明に感銘を受けた彦輔は、詫びなければ思
った。その小さな技が池の寿命を大きく延ばすの
だ。

「知らぬとはいえ、出すぎたことを申しました。お許
しください」

不安そうだった男衆から「さすが高屋の権左じ
や」と声もれる。どの顔も泥で汚れているが安堵

帰り道は夕暮れとなり、細い街道に人通りは少な
い。日が落ちて足元も見え辛い。権左は提灯を取り

出すと、明かりのついた家に、もらい火で訪ねる。
暗闇の中、提灯の灯は心強いが、夜中に歩くな

ど常識ではありえない。街道から人影がなくなり、
辻斬りや追いはぎの危険が伴うからだ。

権左は、そのような危険もおかまいなしに無言で歩
き続ける。竹笹が生い茂り、顔や体にまとわりつく。
それを手で払いながら歩くのは辛い。

峠の道が下り坂にさしかかった。ここを過ぎると、
箸蔵村は目と鼻の先だ。権左は気が緩んだのか、
何度か短い話をした。

若い頃の師匠と呼ばれた男の話が一番長く

権左を一人前に育てるために、長く苦しい修行を課したのだそうだ。その修行のおかげで、今があるという。

たえにもその厳しい修行をさせたのかと訊くと「あたりまえじゃ」と語気を強めた。そしてその修行は、まだ終わっていないともいう。

提灯のろうそくを取り換えるのは四度目だ。予備はもうない。最後のろうそくに火を着け換える。二人は立ち上がると歩き始めた。

その師匠は、いつ権左を一人前に認めたのかと訊いてみる。提灯の薄明かりが権左の横顔を照らし出す。

「わしが十九の年に大雨が降った。わしは一晩中、若い衆と池の堤が切れるのを補修し続けたんじ

や。師匠は朝、現場にやってきてわしにいった。その心根を一生忘れてはならぬとな。それから師匠は、わしに仕事を任せて隠居になった。それだけじゃ」

「師匠はその大雨の日、既に権左さまのことを認めていて、堤を直す仕事を任せていたのではないですか」

権左は黙って歩き続ける。

「権左さまは、たえさんのこと、もう認めているのではないですか、ただ、大雨の堤補修の日がないだけではないのですか」

権左は、それに答えることはなかった。それから、家に帰るまで会話はなかった。もう提灯は必要ないほど明るくなって、目の前に朝焼けに照らされた箸蔵村が見える。

太陽が昇ると同時に家に着いた。二人は、着換え

もせず、体も洗わず、泥のように眠った。

(以上4月22日)